

ニッポン

ドクター和の

臨終回巻



長尾和宏（ながお・かずひろ） 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。西国際大学客員教授。

「がん宣告をうけ約5ヶ月が過ぎました。治療法、食事、生活習慣、価値観、思考、改善しなければならないことが沢山あります（中略）一進一退を繰り返しながらではあります、おかげさまで沢山の仲間の手を借りながら家族共々、次の方に向かえている状況です。年末に少しでも良い報告ができるよう流れを感じながら、気張らず過ごします。生きます」

昨年6月に受けた健康診断で肺腺がんが発覚したときは、ステージ4で、脳とリンパ節への転移を認めました。

男性のがん死亡のトップである肺がんですが、男性だけでも毎年5万人以上が命を落としています。肺がんは、小細胞がんでもあります。肺がんは、初期段階では自覚症状はほとんど現れず、見つかりにくいがんの一つです。早期で見つかるケースは、たいていが人間ドックやがん検診などで発見されます。



④ いときん

若者に人気のヒップホップグループ「ET-KING」のリーダーいときんさんが、肺腺がん闘病中の昨年11月21日、ブログに綴った言葉です。

いときんさんは、このブログから約70日後

と非小細胞がんと大きく2種類に分けられます。さらに非小細胞さんは肺腺がん、扁平上皮がん、大細胞がんに分けられます。が、このうち肺腺がんが60%を占めます。

肺腺がんは、初期段階では自覚症状はほとんど現れず、見つかりにくいがんの一つです。早期で見つかるケースは、たいていが人間ドックやがん検診などで発見されます。

進行するに従い、せきが長時間続いたり、血痰が出る、胸の痛みなどの症状が出てきます。いときんさんがそうだったように、リンパ節などに転移しやすいがんもあります。ステージ4で見つかった場合、外科手術の適応はなく、抗がん剤治療にも大きな期待ができないことがあります。ET-KINGは、2014年にメンバー

3年間活動を続けてきた6人でした。そんな中でのリーダーのがん発覚はファンにとってショックも相当なものだったでしょう。「生きるで」…。いときんさんは、病室にギターを持ち込んで曲作りに励みました。昨年12月28日、ET-KINGツアーファイナルの大阪・難波で、見事ライブ復帰を遂げたのです。舞台上でトレーデマークのハンドピアノを脱ぎ捨てて、上半身裸になると「ありがとう!」「生きるで!」と何度も繰り返しました。

「お父ちゃん、お母ちゃんにもらった体、大事にしろよ。公衆便所やないで。酒やたばこ、体の中に毒、放り込んだらあかんで。病気になつてから、治さんはないへんやからな」と会場に語りかける場面も。先のブログの通り、新たな人生觀をつかんだのでしょうか。憂いなき最期の笑顔でした。

生きるで 最期に届けた笑顔